

国頭山中の避難生活

国頭村奥間 玉城 清威（十歳）

私が戦争を体験したのは満十歳のときで、国頭村奥間に住んでいました。

米軍が奥間に攻めこんできたのは四月十二日か三日で、ちょうどその日、私は父と一緒に部落から一キロぐらい離れたユレジ山で避難小屋をつくっていました。そこへ部落の人が顔色を変えて駆けつけてきて、敵が部落まできたからすぐ逃げると、米軍は奥道の方から戦車を並べて部落の中まで入ってきたというんです。

私の父は国頭国民学校の教頭をしていましたが、若い教員は兵隊にとられて、夜おそくまで残業が多く、また、軍部の宣伝を真に受けて、友軍は水際作戦で敵をせん滅するのだと信じて、また人にもそんな話ばかりやっていたので、こんなに早く米軍がくるとは思っていなかったわけです。

部落の人たちは十・十空襲などの体験から肌で感じて危いと思っていたんでしょう、半年も前から避難小屋を作ったり食糧などを移したりしていました。私の家だけが中南部からの避難民同様に食糧も持たずに着のみのまままで逃げるハメになったわけです。

知らせがあつて、父はあわてて、私を近くのタコッポにいれて頭の上に木の葉をかぶせ、自分は母をさがしに山を駆け回っていました。ところが、子供がひとりで銃砲の音を聞きながら穴の中でジッとしているのは無理なことで、私は恐くなって山の奥の方へ逃げ

うと言っていました。

私たちは部落から五キロほど離れたウナツナガシジという山の中に小屋をつくって住んでいましたが、母は臨月の体だし、私が食糧さがしをやるわけです。部落の近くへは屋は危くて近寄れせんから夜を待って降りていくわけです。当時私も日本軍の宣伝を信じていましたから、捕虜にだけは絶対になってはいかと用心しながら行きました。暗闇の中で手きぐりで畑のものをさがすんですが、作物はほとんど避難民に取りつくされていて、私の手にはいるのは芋のかずらかソテツぐらいのものでした。

そのうち、村の人が父をみつめて私たちのところに知らせてきました。叔父と部落の人たち三名に手伝ってもらって戸板にのせて運んできました。当時は米兵が二、三キロさきまで捕虜狩りにやってくる状態でしたので、朝の暗いうちに救出に向いました。父は重傷と栄養失調で声もでないほど衰弱していました。全身が黒くなって、無数の傷口には白い蛆虫が湧いていました。

後で聞くと、その日ちようど父は自分の死期を予感して枕元の味噌瓶に木炭で遺書を書きのこしてあつたそうです。そういう状態ですから回復するのも長くかかって、ようやくかすれ声が出るようになったのが十日目ぐらいになってからでした。歩くまでに半年はかかったと思います。傷がおさまるのも二か月ぐらいになってからでした。幸い辺土名で病院をやっていた伊礼東頭さんが近くに居ったので、この人から一升瓶にはいったクレンジールを分けてもらって、液を温めて朝昼晩私が傷口を洗ったり手製の竹のピンセットで蛆虫を抜き取ったりしました。

だしてしまい、家族ともはぐれてしまいました。幸いその日の晩、父母とは四キロ奥の山の中で無事めぐり逢えたのですが、父は自分の家まで行くことはできず、とにかく臨月の母を伴って安全なところまで逃げてきたという次第でした。食べ物といえはわずかに私が持っていた一袋のニューヌク（はったい粉）だけでしたからまず食糧のことで困りました。

また、父が何より心配したのは、家で預っている御真影のことでした。仲村渠校長は本部の人で仮住いでしたから、山に近い私の家が安全だろうと父が預っていたわけです。この御真影を米兵にとられてもしたら死んでも死にきれない、早く安全な場所に移そうと、それで翌朝まだ暗いうちに父は山を降りていったわけです。そして部落の近くの山まで来たとき、もうその山の中腹には米軍の陣地ができていて、陣地の周りには地雷が仕掛けてあったわけです。もちろん父はそれを知らないし、まだ暗いうちですから、この地雷に触れてしまつて、何米か吹っ飛ばされ、重傷を負って意識不明になつてしまつたわけです。幸い爆発は背後の方で起つたので内臓には達しなくて即死はまぬがれたわけですが、全身に無数の破片が突き刺っていました。

気がついた時は陽が登っていたそうです。歩くこともできず、必死に腹這いで逃げて、まる一日かかって川沿いの山の中にとどりついたので、ちようどそこには空っぽの避難小屋があつたので、その中で父は一か月間ひとりつきりで重傷の体を横たえていたそうです。そこにあつた水がめの水とニンジンとわずかの味噌でとにかく生き続けていたわけです。部落の人たちの噂では父は死んだら

父が救出されて一か月後、六月十八日に弟が生まれました。部落で産婆をしていた山川さんが近くにいたので産は無事済みしました。それからは、私は父の看病とオムツ洗いと食糧さがしと重なって大人なみの仕事をしなければならなくなりました。

山の中の私たちの食べ物なんですが、芋があればごちそうなんです。桑の葉とかヨモギとか名も知らない草を、人が食えるというものは何でも食べてみました。ソテツが主食になっていましたが、ソテツを刻んで発酵させるまでは草や木の葉を食べて飢えをしのいでいました。国頭の山の中に園田という生物の先生が避難していましたが、この人は食用植物は何でも知っているということで、毎日のように避難民が問い合せにおし寄せてきたそうです。これでは自分の食糧さがしができない、ということになって「山羊の食べられる草や木の葉は人にも食べられます」と書いた紙きれをあちこちの木に貼りつけておいたそうです。皆が山羊にまでなりさがった状態であつたわけです。飢饉の年は椎の実やイチゴがよくできると年寄りたちが言っていました。たしかにその年はいちばんよくできた年で、イチゴなど初めのうちはバケツの半分もとれたものでした。それがまたたく間に取り尽くされてしまったんです。

常食のソテツは幹を切りとつてきて、皮をはいで、水にさらして白い木質のところを真黒になるまで朽して、発酵させてから食べるんですが、避難民のなかには処理法を知らずに、また知っていても発酵するまで待たなくて中毒で死んだのも大分いたようでした。

私の家族も栄養失調で骨と皮になっていましたが、それよりもっとひどいのは町方からの疎開者で、私たちが落した芋の皮を金蠅が

たかっているのかまわずに母親と女の子が争って食べていたのを覚えています。七月のはじめごろになると、山道には栄養失調で動けなくなった者、餓死した者がごろごろがっていました。そこを通ると悪臭がたちこめて、銀蠅がブーンと飛び立って、いつかは自分もあなるだろうかとたまらない気持ちになったものでした。

ある夜、十時ごろから部落の近くに降りて食糧さがしをやっていきますと、そこには何十名と人々が集まってきたので、これに気づいた米兵がすぐ照明弾を打ちあげて機銃を撃ってきました。辺りが昼のように明るくなってさかんに撃ってくるんです。私もねらい撃ちされて、近くにプスプスと弾が飛んできたことが五、六回もありました。私はなるべく陣地付近には近寄らないようにしましたが、大人たちは陣地の金網の下を掘ってカンヅメなど盗んでくるのもしました。またそのために殺されたのもたくさんいました。私はカマスをぶらさげていったんですが、一晩中畑を手さぐりしてやっと袋の半分ぐらいの芋かずらを詰めただけでした。部落から約二キロほどの山の中に一本松があり、そこまでくると前は崖になっていて、真暗だから歩くこともできなくて、仕方がないから松の下で夜が明けるのを待とうと寝てしまっただけです。真夜中ごろ起すのがいるので、米兵かと思っぴっくりしたんですが、部落の人でタイムツを持った親子づれでした。事情を話すとたいへん同情してくれて、途中まで送ってくれたうえ別れるときタイムツを一本分けてくれました。この時のありがたさは忘れられないものです。

また、もう一つ忘れられないのは、ある日沖繩出身の兵隊が塩を持ってきて食料と交換してくれと言ってきたんですが、私は食

は九月になってからですが、十四、五名が降伏してきました。なかには餓死寸前の様子で杖にすがって山を降りてきたものもいましたが、ある連中はまるまると太っていたものです。

沖繩戦は六月二十三日に終わったと言いますが、私は前から後から日本兵と米軍にはさまって、なお一か月もがんばっていたわけです。この一か月でとくに餓死者が増えました。日本軍のデマを信じただのがとくに犠牲を多くしたと思います。米軍が来てから一週間後に山を降りた人たちもいました。この人たちは早くから部落で畑を耕やして当時としては豊かな暮らしをしていました。教育のある者がたいていバカをみています。

七月下旬になると米兵の掃蕩も少なくなってきました。このころは、山には食うものはなくなっているし、米軍は部落から退いて海岸の方に移っていましたから、私は屋間からときどき部落の中まではいくこともありました。私の家は米軍が進駐してから二週間目に火をつけられて焼けてしまっていました。父が気がかりの御真影はどうなったかわからないし、私が小学二年生のときから草刈りややって兄弟みたいにかわいがってきた牝牛と子牛一頭もどこへ行っただかわからなくなっていました。草ぼうぼうの庭に立ってみるとほんとに戦さ世のみじめさが身に沁みてきました。そんなところへときどき米兵のジープがやってきました。逃げるとすぐ撃ってきます。私はまだ少国民という意識が強かったですから絶対に捕虜にはなるまいと逃げていくと、すぐ近くにプスプスと小銃を撃ちこまれたことがあります。近くの小川にとびこんでそこから山に逃げました。私の母もその頃には弟をおぶって食糧さがしに行っていました。

べ物も持っていないし父親もこうして重傷で倒れているんだと話す兵隊はひどく同情して塩を半分わけてくれました。この時の塩のありがたさというのは口ではとても言いあらわせないものでした。この塩のおかげで一家無事生きのびたようなものでした。

七月になっても沖繩戦が終ったということは全然わかりませんでした。日本軍の敗残兵が近くにたくさんかくれていました。彼らはいつも勝った勝ったとしか言いませんでした。

日本兵は毎日のように住民の避難小屋に食糧徴発にやってきました。あと一週間したら連合艦隊がやってくるから隠してある食糧は軍に供出しなさいと、デマをとばすのはまだましな方で、刃物をつきつけたり、手榴弾をふりかざしたりして乏しい食糧を奪っていくのがいました。私の家もやられましたが、床下から天井までさがしてもって行くわけですが、とくに米軍陣地から命がけで盗んできたカンヅメを途中で待ち受けて奪っていくのもいました。お前はスパイだろう、敵に通じているだろうと脅かして強盗を働かすわけです。これは後で捕虜になってからですが、避難小屋に蒲団を取りに行く途中、日本兵の小屋の前を通りかかったんですが、そこは住民の小屋より四、五倍も大きいもので、二段式の寝台まで付いて十二、三名の敗残兵が住んでいるようでした。その小屋の後にアメリカのカンヅメ殻が山のように積まれているのを見て憤慨したのを覚えています。私らがカンヅメを持っているのがみつかるとすぐスパイ扱いにされたのに、彼らはそれを取りあげてたらふく食っていたわけです。実際にカンヅメを持っているというだけでスパイ扱いされて処刑されたという話もありました。この兵隊たちが捕虜になったの

ある日親戚の次郎おじさんと一緒に部落へ行っただころ、次郎おじさんが高台の家からジープがくるのをみつけて「アメリカカーどう、アメリカカーどう」と皆に知らせたところ、皆はクモの子を散らすように川沿いから山の方へ逃げていったんですが、次郎おじさんだけがどうしたわけか正面の山の斜面へ登っていったので米兵からねらい撃ちされて頭を撃たれて即死してしまいました。

私たちが捕虜になって山を降りたのは七月の終りごろで日には覚えていません。米兵を案内してきたのはハワイ出身の二世の上村誠之助という人です。この人は戦前から地元の奥さんをもらって奥間に住みついていました。この人も山に逃げていたんですが早くから捕虜になって、米軍に協力して住民に下山をすすめて歩いていました。村の人たちは前まえからアメリカのスパイだと言って評判は悪かったし、日本兵からも狙われていたそうです。実際この人本人ではないですが、この人の手びきで下山して一緒に住民の説得に歩きまわっていたもう一人の男は日本兵につかまって殺されたということでした。

上村さんと一緒に銃を持ったアメリカ兵が四、五名突然私たちの小屋にあらわれました。七月下旬の午前十時ごろだったと思います。その時のショックといたら、初めて見るアメリカ兵が鬼のようにこわい顔をしていて銃も持っているし、こちらは声も出なくて膝はガクガクするし、腰を抜かしたような状態だったです。銃も持っているから当然殺されるだろうと思っていました。

殺さないと言うが、どうせ一か所に集められたところから殺されるだろうと信用しませんでした。父は重傷で寝たきりですからそのま

ま小屋のこし私らは後から銃をつきつけられながら川沿いに降りていきました。父とはこれが最後だと覚悟して、隣の小屋からニンジンや三本分けてもらって、一升瓶に水を汲んできて、もし生きていたら迎えに来るからそれまでこの水を飲んでいて下さいと言いのこして、弟をおぶって山を降りていったんです。

河原に降りていくとそこには三〇〇名ぐらいの避難民が集められていて、座りこんで、ヒソヒソ不安そうに話合っていました。私はたぶんそこで殺されるだろうと思っていました。アメリカ兵はビケットやチョコレートをくれるんですが初めは誰も毒がはいっていると思って食べないです。アメリカ兵は自分で食べてみせたんですが私はそれでも食う気にはならなかったです。敵から物をもらって食べるということは恥だと思っていましたから、栄養失調で今にも倒れそうなんです山を降りるまで食べませんでした。

そこから行列をつくって、二〇メートルおきぐらいに銃を構えたアメリカ兵が監視をして山道を宇良の部落につれていかれました。大雨のあとで道は滑りやすくてけわしい坂道を歩いたり大きな岩をよじ登ったりしましたが緊張のせいの子供をおぶりながらもよく倒れなかったと思います。

途中のできごとですが、私の前でも後でも女の人たちがアメリカ兵につれ去られていきました。列のなかには那覇から避難してきたジュリ(遊女)たちも混っていました。この人たちは色が白くてすぐ目立つのでとくに狙われたようでした。あっちこちで「アキサミョウ」とか「助けてくれ」と叫ぶ声が聞こえました。私の見ているところでも五、六名ぐらいつれ去られています。その人たち

リカ兵が女がしにきて、どの家でも女をかくすのにひじょうに苦労したものです。もう一つは、山から降りてきてからも食糧事情は悪く毎日のように栄養失調で倒れていく者がたこと。とくに老人がバタバタ死にました。部落で葬式のない日はないといったありさまでした。米軍がくるまえ二月ごろ私の家には読谷から疎開してきた人たちが四世帯二〇名ぐらい住んでいましたが、山から降りてきたときは五、六名ぐらいしか生き残っていませんでした。あと、はみん山の中で栄養失調で死んでしまったそうです。

私の父のことですが、私らがさきに奥間に戻ってきてから二日目に男まさりの叔母が山へ行って父を背負ってきました。やがて傷もようやく治ってゆっくり歩けるようにはなつたので、そのころ学校が再開されて父も呼ばれたのですが、それもことわって家でブラブラしていました。それから一年ぐらいして、父は体が弱って死んでしまいました。

大宜味村登野喜屋の住民虐殺事件

那覇市泊 仲村渠 美代(二八歳)

避難

私の家は泊(那覇市)でじいさん(義父)の仁王(五七歳)さんと夫の元康(三〇歳)とで散髪屋をやっておりました。

十・十空襲のときは元康は防衛隊にとられて、読谷飛行場の部隊で散髪係をやっていました。十・十空襲で家は焼けて、民家の一問

は私たちが捕虜になって部落に落つてからも帰ってきたという話はありませんでした。後で私が蒲団を取りにまた山小屋に行つたとき、椎の木の下に十二、三体の白骨があつたんですが、ジュリとわかるような女性の遺体も混っていました。

その時のこと、私のすぐ前を胃腸を患って今にも倒れそうな六十ぐらいの爺さんと年ごろの娘さんが歩いていました。たぶん孫だつたと思います。女たちはたいい顔に泥をこすりつけたり男物の着物をつけたりしていたんですが、その娘さんは若いので目立つたのだと思いますが、アメリカ兵に手首をつかまれてつれ去られようとしたわけです。すると爺さんが全身の力をふりしぼって体ごとアメリカ兵にぶつかっていったんですね。アメリカ兵はよろめいて離れたんですが、銃を向けてきて安全装置をガチャンとはずしたんです。すると爺さんは胸を張って撃つなら撃てと立ちふさがり、これを見て避難民たちもアメリカ兵をとり囲むようにして無言でにらみつけたわけです。アメリカ兵はだんだん後ずさりして、とうとう娘さんをあきらめてしまいました。

十二キロぐらいの山道を歩いて宇良部落につきました。そこで一泊して、翌日一里ほど離れた自分の部落に帰されたんですが、そこですでに米と塩の配給がありました。皆は配給されるのも待ちきれずにワッと塩の方にたかっついていきました。それほど塩に飢えていたんで、砂糖みたいにうまそうになめたものです。

私たちははじめて沖繩戦が終つたことを知らされました。しかし、それでもすぐ平和になつたわけではなく、捕虜になつてもまだ安心できませんでした。山から降りてきたその夜から毎晩のようにアメ

を借りて、さいわい店の鏡は泊高橋の下の水のなかにかくして無事だったので、空襲あとも仁王さんが散髪屋を続けていました。長男の英一が生れたのは二月二日(昭和二十年)で、このころはしょっちゅう空襲がありましたが、生れて四か月に夫がちよつと帰ってきて、ああ長男が生まれたか、と喜んで、すぐひっ返していききました。夫はそれっきりです。読谷飛行場ですからまっさきにやられたと思いますが、見た人もいないし、知らせも何もなくて、骨も返ってきません。せめて、長男の顔を一目でも見たのが幸いだつたと思っております。

山原に疎開したときは、私の家族は、仁王さんに、ウトさん(五五)、私に、義弟の正夫(十四)仁(五)、それに私の子供で長女の康子(三)と長男英一、それからウトさんの弟の嫁で宮城ツルさんとその子元成(十五)、全部で九名で逃げています。長男がまだお腹にいたころ、内地に疎開しようという話はありませんでしたが、じいさんが、そんな大きなお腹をしてどうして船に乗れるか、と反対したのでそのままになっていましたが、散髪屋に来る人たちが、もう上陸するよ、という噂をしていたので、こんどはじいさんが疎開しようと言いだして、私は船はもう危いからと言つたんですが、とうとう三月二十二、三日ごろに最後の船が出るというので、それで家を片つけて、黒砂糖とか鯨節なんかみんな荷物にいろいろ、那覇の棧橋までいって荷物はぜんぶ船に積んで、十二時から人がのるといって並んでおいたら、そこに空襲がきたわけです。船長さんが今日は船が出ないから皆んな帰らなさいといつて、何も持たずに逃げてきたんです。船はすぐ空襲を受けて、目の前で燃えて

しまいました。

泊の今の水源池の近くにうちの門中墓がありましたので、空襲のときはいつもそこにかくれていました。那覇棧橋からあちかくれこちかくれして逃げてくると空襲はもう激しくなると、どこにも行かれぬからみんな壕(墓)の中にかくれていたんです。すると、ちょうどその日の五時ごろから港川(具志頭村)に艦砲がはじまっているんですよ。お巡りさんがまわってきて、きょうから艦砲がはじまっているから皆んなこちから立退きなさいと言われて、もう大変だと思って、それから子供をおんぶして、山原の方に発つて、それから毎日ずっと空襲ですよ。昼は空襲で、五時ごろから飛行機がなくなるから、歩いて、朝がたになるとまた編隊を組んでくるので、どこの壕にでもかくれて、こんなことをして名護まで八日ぐらいいかりました。そこからまた、昼はかくれ夜は歩いたりして、東村の嵩江・新川まで四日かかって行きました。

途中何でも空襲にあいましたが、親子も散りちりになって、あちの壕こちの壕と、どんな小さな壕にもとびこんでかくれました。が、ちょうど川田・平良(東村)に来たとき三〇〇機ぐらいの空襲にあつて、すぐ近くの壕にとびこんだんですね。そこは車の壕で、材木でワクをはめこんだ頑丈な壕で、おじいさんとおばあさんはここにはいったんですが、私は、子供が泣いたら敵の電波探知機に知れるからと兵隊がいないで、弾はパラパラくるし、仕方がなくして私は子供たちを抱いて近くのニービ(泥板岩)のガマ(岩穴)にとびこんで、正夫と仁と私の子供二人を両手にかかえてかくれていたら、五十メートルぐらいはなれた軍の壕めがけて大きな爆撃が落ち

護から嵩江・新川(東村)まで三、四日かかっていきました。私たちはおくれで避難したので、どこも避難民がいっぱいで、それで東海岸までいったわけですが、東村の役場(平良)でおにぎりをひとつもらったのが最後でした。

嵩江部落は家は三、四軒ぐらいいしなくて、食べ物はないところ、仕方がないからその裏山にのぼって避難小屋をつくりました。私たちと一緒に四世帯二十人ぐらゐの避難民と一緒にいましたが、食いはなにもなくて、二里ぐらゐ歩いてヨモギを一つかみとってくるのがやっとのありさまでした。嵩江にきて四日目ぐら下の小川で地元の人が豚をこしらえていたので、おじいさん半斤でも分けてくれないねえと頼んだら、避難民がもこれ食うかと断わられて、ほんとに情けなかったですよ。避難民はじゃま者あつかいされて、金ももっていないで売ってはいけません。

嵩江・新川の山には二週間ばかりいました。おじいさんが、こんなところで飢え死するくらいなら、どうなつても自分のところへ、那覇へ帰つてみようと言うから、私もそうしようといつて山をおりたわけです。他の人たちもいっしょについてきました。それで南の方へ歩いていくところを平良でアメリカにつかまつたわけです。

日本兵による虐殺

海端の道を歩いていると、向うの浜の方でアメリカがたくさん遊んでいたんですよ。私たちはすぐみつけられて、どんどん追っかけてくるんですよ。あのときは、初めてアメリカを見て恐くて、もう今日は死ぬんだと思いがら山の方へワッと逃げたわけです。

てきて、向うの壕は何ともないのに、その震動でうちのガマがドッと崩れてきて、私たち五名いっぺんにニービに埋められてしまったんです。さいわい私は口から上は出ていきましたから、その時の私のあわてかた、爪でこんなこんな土をかきどけて、子供たちを頭からひっぱりだして、やっと窒息はまぬがれたんですが、目にも口にも土がはいってワァワァ泣くし、あの時の苦しかったことは、もうこんなにしてまで生きなくてもいい、皆んな一緒に死のうねえ、と言いましたよ。

それからはもう生きた心地はなくてただフラフラと歩いていただけです。ちょうど、この川田・平良で、敵は上陸しているよう、と聞きました。それでびっくりして山に逃げたんですが、三、四日して山は大雨になって、雨がザーザー降るのにハブの恐さも忘れて、殺されるより逃げられるところまで逃げた方がよいと思つて、子供を抱いて三歳の長女は歩かせて、木の下に雨がチョンチョン落ちてくるなかで夜をあかして、着がえもないから濡れたまままた山を歩きました。でもお婆さんはマリリアにやられてしまいました。

那覇から名護までは、昼はかくれて夜は歩いて八日かかりました。途中民家の馬小屋にはいって、飼葉桶からイモ皮をあさつて食べたりして、ほとんど一日一食、何も食べない日もあって、いちばん困ったことは乳呑児をかかえて乳が出なくなつてしまつて、私は何でも飲めば出るだろうと思つて、海から一升瓶に潮水を汲んできてそれをゴンゴン飲みました。山原にはいると役場で炊出しをやっているというので行ってみるとおにぎりを一個ずつくれました。名

するといきなり私の目の前にアメリカ兵がとびだしてきて、待て、と手をひろげたわけです。そのアメリカ兵が日本語が達者で、あんたたちはどこへ行きますか、ときくから、私らはどこも行くところがないから那覇の家に戻りますと言つたら、向うはいま兵隊さんが戦争をやっているから危い、というわけです。

それから男たちには煙草をくれるし、女子供にはチョコレートをくれるわけですが、私らは毒がはいっていると思つてだれも食べないですよ。するとそのアメリカ兵は自分が半分食べてみせてから私らに食べさせました。

歩いているところを、またジープをもつてきて、四台か五台ぐらゐに分散して乗せて、羽地の田井等につれていってくれるというわけです。それで山を越えていくと、ちょうど登野喜屋(現在の大宜味村白浜)のところへ来たとき六時ごろになって、その兵隊は、向うまで行く時間がないからあんたたちは今夜ここで泊りなさいね、といつて私たちを降ろしてしまつたわけです。そこが登野喜屋の部落の入口だったわけです。

私は初めからこの部落には気が向かなかつたんですよ。というわけは、後のジープでおばあさんが着くあいだ部落入口の道に立っていたら、アメリカ兵がひとりピストルをつきつけてきて私をどこかへひっぱつていこうとするんです。反対したら撃たれるし、ひっぱつていかれたら恥だし、私は子供をだいてどうしていいかわからず立っていました。運よく向うから上官らしいアメリカ兵がふたりやつてきたので、そのアメリカ兵はすぐ逃げていってしまいました。私がおじいさんに、ここは恐いからどこかへ行こうと言つ

たんですよ。それで、一晩だけはここへ泊ってみようというから部落の中へはいっていったら、ここは何んでもあるんですよ。部落の人は山へかくれてしまつて、イモ粕はあるし味噌はあるし塩なんかもあるし、あの時は盗み放題ですから、私たちは民家にはいって落ちついたわけです。おじいさんが、ここは何でもあるから、もうどこにも行かないで、ここで暮しておこうね、と言うから、そうかねえ、と言つて落ちついたわけです。その日東村からジープでつれてこられた人たちが、一軒の家にはいった者で、那覇の親泊さんたちは名前も覚えていません。

渡野喜屋は収容所といっても囲いは何もなく、毎朝三名のアメリカ兵が見まわりにきてすぐひつ返していくぐらいのものでした。十二、三軒ぐらゐの民家に九〇名ぐらゐの避難民が住んでいました。なぜ人数を知っているかという、後でアメリカから配給があったとき、おじいさんは班長をさせられて、私が人数を調べにまわつたので覚えています。

次の日にアメリカ兵がジープでやってきて、明日から配給があるから、うちのおじいさんに、あんだ班長になれと任命しました。おじいさんは無学ですが、散髪屋で、黒い背広をつけていたから、それで目立つたかもしれません。

その次の日の午前中に配給がきました。一日食べる分しかありませんが、珍しいものがたくさんありました。その日の昼ごろ、ポロポロの服をきた男がひとり部落の中をぶらぶら歩きながらあちこち見こち見して通つていきましたよ。おかしいね、乞食かねと思つたんですが、今から思うと日本兵ではなかったかと思ひます。

長いロープで、ひとりずつジュズつなぎにしました。私は子供を抱いていたから縛られずにすんだんですが、その部落にはおじいさんと、そのほかに二十三ぐらゐまでの男たちが七名ぐらゐいたんですが、男たちは別に両手を後に縛つて、兵隊手ぬぐいで口をふさいで、後で別のところへつれていったようでした。

日本兵は、刀をもつた曹長みたいな人と、それから、戦闘帽に〇軍曹と書いた人と、そのほかには普通の兵隊が九名ばかりいました。兵隊たちの服装はまちまちでしたが、陸軍の半袖の夏服を着ていました。

軍曹がおじいさんに向つて、おまえが班長だそうだな、というのが聞こえました。また、私の前にいた兵隊は私に向つて、おまえの夫はどうしているか、ときくから、防衛隊にとられました、と答えると、そうか、おまえは夫に済まぬことをしたな、と言いました。私はそれで何となく不吉な感じがしました。でも、まさか殺すとは思つてもみなかったですから、暗い山道をひっぱつていくのではぐれないようにロープで縛つたんだらうぐらゐに考えていました。

私たちは兵隊に引つ立てられて海岸の方の広場につれていかれました。そこでおじいさんたちとは別々にされて、それきり帰らなくなつたわけです。

隣の家に話合の人で四十ぐらゐの人がいましたが、体が助膜か結核になっている背の高い男で、その人は縛られて歩けといわれても歩けなくて、それでその家の柱に縛りつけて、喉のところに刀で刺して殺してありました。それは私、翌朝荷物をさがしに戻つたとき見たわけです。その人の嫁さんは子供をおんぶして皆と一緒に広場

五時ごろ、私たちがはいつている家の家主という五十ぐらゐのおばさんが山からやってきて、おじいさんと話していきました。あんなたちはタバコはあるしカンヅメはあるし、いいね、といつていました。おじいさんは、こんな時だからおたがい助け合つて命を大切にしようね、といつてカンヅメを分けてやりました。その人は、あんな達はこんな物をもらつて、アメリカは何かやれと言わないか、とさぐるようなことをきいていました。私たちは明日はどうなるかわからないのに、アメリカはただやるだけで作業もさせないよ、とおじいさんが答えていました。

日本兵がやってきたのはその日の夜中です。部落へついて足かけ三日目の夜になります。そのころから、友軍はこわくなつていました。それまで避難民はチーパッパー（フキ）など山に取りに行つていたんですが、友軍がきて取り上げてしまうという話は私も聞いていました。しかし、いくら何でもあんなおそろしいことをするとは思つてもみなかったですよ。

私たちが一軒家に三世帯で寝ていると、夜中に戸をドンドン叩かれたわけです。私は、アメリカが殺しにきたのかと思つてびくつきして、誰ねえ、ときくと、友軍だ開ける、という返事だったので安心したわけです。すると、前の戸も横の戸も取りはずしてしまつていっぺんにはいりこんできたんです。

明りをつけろ、というから、私のおじいさんはランプをもつていたから、燈芯に火をつけてもつてくると、刀を持った曹長みたいな人が、刀のさきでひとりひとり叩いて、起きろ起きろ、といつて皆んなを起こしました。それから、何んにも言わずに、持ってきた

に来ていましたが、その家の方から大きな声で、アキサミヨと男泣きで泣くのが聞こえてきました。嫁さんはうちの父さんが泣いているがどうしたんだらう、と心配してました。

私たちは広場につれていかれて、そこに座られました。班長の家族は前に出ろ、というから、私たちが最前列に座られました。

私は、何か訓示でもやるのだからと思つていました。ところが、前の方に、兵隊たちが一列に並んで立っていて、皆んな手榴弾を持つていて、曹長みたいな人が号令をかけるんですよ。一、二、三、と。

ニイと言つたときに手榴弾の煙がシューシューと私らの方にふきだしてきたんですよ。私はねんねこをつけていたから、アキサミヨとねんねこを頭からひっかぶつたら、パンパン鳴つたわけです。アツという音ですよ。私のねんねこの上から弾が通つて、ねんねこは裂けて頭のとっぺんのところの髪が焼けてしまつています。後の方では一言も声もださずに、皆んないっぺんにこと切れているんですよ。私はどうもないが、死ぬというのはこんなものかねえ、と思つて、皆んな声もないけどどうなつていのかと思つてさわつてみたら、皆んな仰向いて死んでいるんですよ。

私は元一を抱いて、いちばん前の列ですぐかがんだから助かったわけです。元一も無事でした。おばあさんは私の側で仁を抱いていたのに、仁は直撃で即死してしまつて、おばあさんは自分も傷を受けているのに生きていたので、仁はこんなになつてしまつて、とおろおろしているわけです。おばあさんは右手の指二本吹きとばされてました。康子は私の側に座つてましたが、いつもは泣き虫だったのに私のひざにもたれて黙つていられるわけです。私はこれも直撃

で死んだものと思つて、もうあきらめなさいね、友軍にやられたんだからアメリカにやられるよりましよ、もうあきらめてね、と言うたら、ウンと返事をするんですよ。生きていたんですよ。私はというと、頭の髪をはぎとられて、それに、今も傷がのこってますが、ひざのところに破片がつきささっていましたが、その時は痛いとも何とも思わず、半年後になつてから、仲尾次の収容所で、何かおかしから軍医にみてもらったら、はじめてわかつて破片を抜いてもらったんですよ。あの時は食糧のことで頭がいっぱいで、自分の傷のことも気がつかなくなつたんですよ。正夫は片足をもぎとられて、病院で亡くなっています。宮城ツルさんは即死です。腹わたがみんなとびだして、ひどいやられ方だったですよ。その子の元成も破片でやられて、これは病院にかつぎこまれてから亡くなっています。

この手榴弾が投げられたのが午前三時ごろだったと思います。二時間ぐらいして夜が明けてきましたから。私たちが気がついたときはもう日本兵はいなくなっていました。また襲ってくるかもしれないと思つて、百メートルぐらい離れた森のところに移つてかくれていました。夜が明けて、その森のところには毎朝十時ごろアメリカ兵が見まわりに来るんですが、その日もアメリカ兵がきて、あんなたちは何でそんなところに立っているのかときくから、あそこを見てごらん、と教えると、アメリカ兵もこれは大変だとあわてて、私に五本の指をだして、五分たつまでどこにも行くな、という意味のことを言つて、すぐひつ返して、やがて通訳の二世がふたりと、銃をもつて兵隊が五、六十名ぐらいやつてきて、私に説明させるんですよ。

ちが刀で斬られて死んでいたそうです。その遺骨は部落の人たちが一か所に葬つてありましたが、どの骨かも分からないのでそのままになっています。

あの事件の生きのこりで私が知っているのは、私の家族の四名（ウト、美代、康子、元一）と、内間（浦添村）の島袋さんと、那覇の親川マカテという人と、それから伊波何とかという人、もうひとり那覇出身の当時六十歳ぐらいの女のひと、全部で十名もいなかったと思います。

私たちは仲尾次の収容所につれていかれました。そこにいても、いつも夜になると友軍がはいってくるような気がして恐くて二か月ぐらいはほとんど眠れませんでした。翌日から、収容所のスピーカーから山に向つて、避難民はすぐ降りてきなさい、間もなく山にガソリンをまいて焼くから早く降りてきなさいと一週間ぶつ続けで放送していました。

国の責任を

大宜味村喜如嘉 知名 ウト

私たち遺族にとつて、どうしても納得のいかないことです。私の夫が、沖繩戦も終つた昭和二十年七月三日、日本兵に殺されたことについて、日本政府はどのようなつぐないをしてくれるのでしょうか。

私は、事情をくわしく書いた陳情書を、昭和四十六年に政府へ提

これは誰がやったかというから、友軍がやりました、ということ、なかなか信用しなくて、それで私はいっしょうけんめい説明して、ちようどその広場から二間ぐらい離れたところに福木が一列に並んでいて、その木に手榴弾の破片がつきささっていたので、それを調べて日本軍にまちがいないとわかつたわけです。

アメリカ兵はまたジープをもつてきて、負傷した人を病院へ送つて、負傷した人は六、七名いましたかね、それでもやっぱりこの人たちは全部死んでしまつたそうです。生きていて元気な者には、あんなたちは、ここは危いからすぐ羽地へ行きなさいと云われましたが、私たちはまずツルさん、仁の体をさがして近くの岩穴にかくして、それから、これからも生きていかなければならないからと、食糧や荷物を取りにもとの家まで戻つたわけです。その間にアメリカ兵は死体をスコップですくつてトラックに積みこんでいました。

家に戻つてみると、荷物は何一つ残つてないんですよ。毛布からカンヅメから全部持つていってしまったんです。隣の家に行つてみると、そこも空っぽになつていて、さつき話した説谷の人が柱に縛られて頭をたれていて、まだ生きているかと思つて顔をあげてみると、喉のところに黒い穴があいてこときれていました。刀で一突きに刺したような穴でした。日本兵は食糧をとつていったわけです。

おじいさんたち男の人たちはどこへつれていかれたかもわかりませんでした。わかつたのはずっと後で、新聞に出たので、私はすぐ登野喜屋に行つて区長さんに聞いたんですよ。話では、部落から百メートルぐらい離れた裏に一本松があつて、そこに六、七名の男た

出しました。私の陳情の主旨をわかつてくれる人は、どこにもいないようです。そこで私は、この陳情書を県史に記録としてとどめておいて、国の責任を永久に追及してほしいと思つています。以下はその陳情書の全文です。

私の夫、知名定一当時四五歳は、太平洋戦争の終戦間際に、沖縄本島大宜味村字喜如嘉部落俗称当山という山林内で戦時中のスパイ容疑を受け、元日本兵数名によつて虐殺されましたが、戦時中とはいえ、その残虐性は人道上的ことからしても許されるものではありません。なお、汚名を返上してもらうよう、本土政府におかれましても実情ご調査の上、私たち遺族に適切な補償をなしてくださいよう陳情致します。

記

一、夫の本籍、住所、氏名、年齢

本籍 沖縄県那覇市首里寒川町一の七番地

当時の住所 沖縄県国頭郡大宜味村字喜如嘉六五九番地

元沖縄県巡查 知名定一 当時四五歳

二、夫の経歴及び遺族の氏名

故知名定一は、明治三十四年四月本籍地で出生、大正十三年沖縄県巡查を拝命、那覇警察署及び名護警察喜如嘉巡查駐在所勤務を経て、昭和十七年依頼退職し、その後太平洋戦争は肩書住所に居住していました。

家族は、妻ウト現在六九歳、長女昌子三三歳、二女明子三一歳の三人暮らしで、戦時中は戦災を免がれるため、台湾へ疎開し、昭和二二年九月、台湾から引き揚げ、しばらく大宜味村字喜如嘉の災

家へ身を寄せていましたが、夫の虐殺事件を苦にし、昭和三年肩書住所（那覇市真嘉比）へ転居し現在に至っております。

三、夫の死亡年月日

昭和二十年七月三日

四、虐殺場所

国頭郡大宜味村字喜如嘉部落よりおよそ四キロメートル離れた俗称当山の山林内

五、事件の経過

昭和二十年四月米軍が大宜味村喜如嘉部落一帯の民家搜索のため進駐して来た際、たまたま食糧取りに自宅に来た夫は、米軍により捕虜となり、国頭郡羽地村の難民収容所へ収容されておりました。収容中のキャンプで、羽地村、初め沖繩中、南部一帯の住民は、避難先の山や壕から適切なキャンプに収容され、米軍から食糧、衣服類も住民に配給されており、治安状態も維持されていることを聞かされ、捕虜釈放後、夫は喜如嘉部落に帰り、部落民に対し、以上の情報を話し、早々山から下山するよう勧めましたところ、当時喜如嘉部落の俗称当山という山林内には、一般部落民から食糧の供出を強要し生活していた元日本軍の敗残兵紫雲隊と称する十五名内外の兵隊達が山林内に立てこもっておりまして、夫は、部落民に対し、捕虜収容中に得た上記情報を部落民に話し、山から早く下山するよう勧めたところ、彼等は、スパイ行為であると曲解し、昭和二十年七月二日の夕方、紫雲隊所屬の伊沢曹長以下数名が夫の住家へ来て、スパイ行為をしていると称し山へ連行しようとしたので、夫は軍機に触れる行動はしていない

と釈明しようですが聞き入れず、目隠しをなし、両手を後手に縛りつけ、銃剣で刺殺し山林内へ埋めた事実。

六、部落民の反響

夫が警察官として在職中、永年に亘り喜如嘉部落の駐在巡查として勤務し、部落の治安維持のため精魂を傾け、指導者として信頼度も高く買われております。戦時中のスパイ容疑により悲惨な死を遂げた夫に対し、部落民は今なおその死を悼み、多くの同情が寄せられています。以上のような残酷行為に対し、私達遺族は憤りを感じ、睡眠も充分にとれない日も多くあります。部落民の話によりますと、夫が羽地収容所よりの煙草並に食糧を持っていたとのことで、それを欲しさにスパイ容疑をかけたとのことであります。

なお、夫のほかにも数名がスパイ容疑でリスト・アップされていたようですが、部落民の下山が早くなってその難を免がれたとのことです。

何卒、以上の事実をご調査の上、夫の汚名挽回と私達遺族に対する生活補償ができますよう陳情申しあげます。

伊平屋島・伊是名島